

カザフ共和国科学アカデミー通報、社会科学編 一九八二年三号（ロシアのカザフスタン併合二五〇周年記念会議から）

森川 晴

一九八一年九月、アルマ・アタに於て、カザフスタンのロシアへの併合二五〇周年を記念して、「カザフスタンの民族の歴史的運命におけるロシアの積極的役割」と題する会議が開催された。一七三一年をロシアによる併合の年とするには若干疑義があるが、それはさておき、この会議で読まれた報告が、*« Известия АН Каз. ССР. серия общественных наук. »* 『カザフ共和国科学アカデミー通報、社会科学編』一九八二年三号誌上で特集されているので、紹介しながら何が問題となっているのか探ってみようと思う。

まず、収録されている各報告の題名は以下のとおりである。(番号は評者)

(一) クメコフ (Кумеков В.Е.) 「ロシアへの併合直前のカザフスタン社会経済組織」

批評と紹介 森川

(二) カシムバエフ (Касымбаев Ж.К.) 「カザフスタンのロシアへの併合期の民族解放運動の特徴と推進力」

(三) エロフエーワ (Ерофеева И.В.) 「一八一—一九世紀前半ロシア史料学研究からみた、ロシアへのカザフスタン併合の最初の段階の若干の局面」

(四) バシン、ウムルザコフ (Башин В.Я., Умурзаков У.А.) 「ロシアへのカザフスタン併合期のロシア・カザフ間貿易」

(五) オクラードニコフ、ヴァイルロン (Окладников А.П., Вайльрон О.Н.) 「一六世紀から一八世紀第一、四半世紀の間の、西シベリアのロシアへの併合とカザフスタンとの経済的関係の発展」

(六) カトウシヨフ (Катушов К.И.) 「カルムク民族の歴史的運命におけるロシア」

(七) ガジエフ (Газиев В.Г.) 「北カフカス諸民族のロシア国家への参加」

(八) トロチコ (Троичко В.С.) 「ロシアへのカザフスタン併合に関する史料としての軍の定期刊行物」

(九) ユブランディン (Юбландин К.И.) 「一九世紀中頃から二〇世紀初頭の内オルダ政治行政機構と所轄についての問題」

(一〇) アリジャンノフ (Алижанов М.А.) 「ロシア労働者階級と

タジキスタンにおける社会主義の勝利」

- (一) バクーニン (Бакунин А.В.) 「ウラル・クズバス建設におけるカザフスタンの役割」

- (二) アキロフ・トラハズニヨン (Акилов К.А., Трахеников Г.Е.) 「ソ連邦諸民族の文化の相互影響と相互作用の過程における中央アジアとカザフスタン」

- (三) タティベコワ (Татищева Ж.С.) 「キルギス社会主義国家の発展について」

- (四) エルザゴロヴィチ (Ерзагович В.Г.) 「音楽文化におけるロシア・カザフ関係の起源」

- (五) カラエフ (Караев А.) 「カザフ・トゥルクメンのソビエト時代の韻文の相互関係」

- (六) ムカシエフ (Мукашев Р.Ж.) 「二〇年代のカザフスタンにおけるソビエト国家機関の確立史から」

- (七) カリシエフ (Калишев А.В.) 「民族間結婚家庭の青年の民族籍決定についての問題」

以上をみるとわかるように、その内容は歴史に限らず社会科学全体の広い分野にわたっている。以下、順次簡単ではあるが、各報告の要点を中心に紹介しようと思う。ただ、評者は一八世紀カザフスタン史を専攻しているので、ややもするとその方面に重点がおかれるかもしれないが、御寛恕願いたい。

(一)はタイトルからもわかるように、多岐にわたる問題を扱っているため、これまでの研究成果をまとめた概説の域をでていない。例えば一連の遊牧封建論争で問題になったことが、基本的生産手段を土地とする説と家畜とする説を示し、報告者はナツァクドルジ (Ш. Хантөре) 説、即ち両者であるという説を採っている。ただ、土地の封建的所有については、カザフの場合、曖昧な形であらわれた、つまり、封建的上層部は、遊牧地の管理、移動の決定、最良の夏营地・冬营地の利用権を有していたと述べる。ただしカザフスタン南部では明瞭にあらわれ、彼らは世襲により特権を得、都市とその周辺村落を封建的に支配していたとする。しかし、遊牧社会における封建制が問題となっているのであるから、同じカザフスタン領域とは言え、都市部をも含めて同列に論ずるのは、やや無理があるように思われる。

また、カザフ社会の基本的組織がアウルであるとし、それを多くの特殊な族長的制度の遺物をもった地域的近隣単位と説明している。ここでは土地利用は共同で、家畜は個人所有だったとする。そして族長の権威が高く、祖先崇拜が為され、その族長的制度は一般民からの搾取の強化につながったという。これはソビエト歴史学界の通説ではあるが、アウルの実体が先の説明のように、必ずしも明らかにはなっていないため、疑問の残る点である。

その他、社会構成についても触れており、封建領主（ハン、スルタン）、封建的・民族的貴族（ビー、バイ）、ムスリム貴族、一般民、奴隸と、階級を分け、税のことに若干触れているが、大きな問題を含む箇所をあまりに簡単に断定的に論じているようである。

最後に、カザフ社会は、中世後期、停滞はしなかったが進歩の速度は緩慢であったとし、一八世紀初頭のジュンガルの侵攻により、危機的現象をみるに至ったと述べている。そして、遅れた経済に変動をもたらしたのが、ロシアとの経済的・政治的関係の強化であったと結論している。

先にも述べたように、幾つかの重要な問題を列挙しているので、現在のソビエトにおける研究動向及び通説を知るにも有益な報告である。

(一)は、言わゆる、バートル・スリムの蜂起とイサタイ・タイマノフの蜂起に関する報告である。

前者は、一七八三―一七九七年、小オルダで起ったもので、プガチョフの乱に呼応していた。報告者は、スリムが、反ロシア、ロシアによる併合反対を唱えて戦ったのではなく、反植民地的圧迫、反封建的圧迫を訴えて戦ったと述べているが、これは些か詭弁に類するだろう。また、この運動には、ビーやスタールシナ（長老）たちが参加したが、その理由は、小オルダがロシアに組込まれることが彼らの利害に対立するため

だと述べているのだから、明らかに先の主張と矛盾している。

後者は、一八三六―一八三七年、内オルダで起った反乱である。報告者によると、前者より明瞭に、反封建主義、反植民地主義があらわれているという。ツァー政府がカザフの土地に堡を築いたり、税を強化したりしたことや、さらにツァー政府役人の専横に抗議して、その土地の住民が立上ったが、一方、カザフ上層部とツァー政府が、それに対して結託して事を処理したことにより、運動は反封建主義の性格をもつに至ったというのである。ところが、イサタイ自身がスタールシナグループの代表であったことに限界があり、結局は敗北につながったと述べられている。それにしても、これをその後一九世紀後半のトゥルガイ、ウラリスク兩州での蜂起（一八六八―一六九年）、マングシユラクの蜂起（一八七〇年）へ継承されたとしている点は、それは一応領けるとしても、ロシアにおける農民戦争の系譜の中に位置づけ評価しているのは、いかがであろうか。

(二)は、初めに一八―一九世紀初頭の研究蓄積を簡単に概括しており便利である。一八世紀ではリチョン（П.И. Рычков）とアンドレーフ（И.Г. Андреев）の名を挙げ、その他、外交使節の残した資料に注目している。一九世紀初めでは、雑誌《Юнгокий вестник》『シベリア通報』《Азиатский вестник》

『アジア通報』誌上で活躍した人々の名を挙げてゐる。

本論に入つて、カザフの支配者たちがロシアに接近した原因を次のように述べている。対外的なものとして、①ジュンガル、中国、中央アジア諸汗国の脅威、②バシキール、カルムクとの対立、緊張關係、対内的なものとして、①内訌、封建的不和反目、部族間対立からの脱却を望んだこと、②ロシア市場に参加することにより利益を得て、さらに新たな牧地の獲得をも望んだこと、である。これはとくに目新しい説ではなく、今までの研究で言われてきていることではあるが、要領よくまとめられている。

次に一八世紀からの概略を述べている。一七五八年のジュンガルの崩壊により、ロシアは清朝と直接に境界を接することになったが、そのため、ツァー政府は対抗上、カザフスタンで影響力を強化しようと努めた。当時、中オルダの سلطانであった、バラク、アブルフェイズ、アプライらが清朝と關係を持っていたため、ロシアは、貿易、穀物や贈物の下賜、冬営地に家を建設するといった懐柔政策によつて、中オルダとの關係強化を図つた。一八世紀末になると、反乱を焦点に、小オルダでの事件が専らロシアの関心事となる。一九世紀に入るとロシアの政策が効を奏し、一八二二年に「シベリアのキルギス〔カザフのこと―評者〕についての規定」が施行される。この一八世紀から一九世紀初めの、歴史を研究

する史料として、アルヒーフを補足するのが、当時の旅行家、学者の著作だと述べ、高い評価をそれらに与えながらこの報告を終つてゐる。

非常に明瞭で、無理なこじつけもなく、研究序論として好論であらう。

(四)は貿易關係的をしぼつて論じたものである。報告者によると、一五世紀九〇年代から両者は善隣關係を結ぶ必要があり、ロシアの側は、ヨーロッパ諸国から世界市場に参加することを阻害されたためカザフスタンに目を向けた。即ち、カザフスタンの役割は、安価な原料源、販売市場、資本蓄積のためのものであつたとする。他方、カザフは穀物、日用品などが必要であつた。そこで、ロシアは日用品、鉄製品、穀物などを、カザフは皮革、羊毛、馬を輸出し、オレンブルク、オルスク、ヤミシエフ、トボリスク、セミパラチンスク、トロイツクなどのシベリアの要塞都市が交易場所となつた。関税の軽減などによつて仲介商人を優遇し、ロシアは貿易の振興を図つたので、例えば一七四五―一七四四年、オレンブルクでの取引総額は、一一八九万四九二五ルーブルにも達したという。

アルヒーフからの資料を随所に引用し、かなり具体的に描写されており、カザフ史の専門家であるバシンの名を恥ずかしめない報告である。ただ、かなりの部分、彼の先年の論

文「Казахстан в системе внешней политики России в первой половине XVIII века」「一八世紀前半のロシアの対外政策上のカザフスタン」(《Казахстан в XV—XVIII ввек》『一五—一八世紀のカザフスタン』アルマ・アタ、一九六九年、所収)と同じ史料、同じ文章を用いている。右の論文では、「カザフスタンは単なる目的ではなく、ロシアの東方政策の実行上、重要な手段であった」と、的確にカザフスタンの持つ意味を述べているが、当報告では、公式的にマルクスの「ロシアは東方においては進歩的に働いた」という一節を引用し、ロシア・カザフ貿易が、ツァーリズム政策にもかかわらず両人民の結合を促したという評価を与えているのは、安易すぎる恨みが残る。

(四)は、一六世紀末から一七世紀初めのロシアによる西シベリア併合が、カザフスタン・ロシア関係に大きな役割を果たしたという主旨の報告で、他のものが多くて五、六ページであるのに対し、これだけは一五ページにも及んでいる。まず、ロシア・カザフ関係は経済が中心であったという観点に立ち、そもそも時代的に次の三段階に分けられるとする。①一五世紀末から一六世紀八〇年代、②一六世紀八〇年代から一八世紀三〇年代、③一八世紀三〇年代から一九世紀六〇年代。各段階の初めの時期は、双方が対内的にも対外的にも変革を迎えた時であったとし、例えば①の一五世紀末は、ロシアは、

外国の支配が解かれ、「ロシアの地」というものが広がり、手工業、都市の発達が始まったときであり、カザフスタンは、民族の形成・発展、カザフ汗国の興隆、三オルダの形成、シビル汗国や中央アジア諸汗国、オイラトの危険にさらされた時期と説明する。しかし、ここに三オルダの形成を入れるのは疑問である。形成時期についてはまだ不明で、主として、汗国の衰退とともに分れたという説と、民族形成時期にすでに分れていたという説とがあるのであって、報告者は後者の立場を採っているようだが、何ら説明も根拠もなく当然のこととして論ずるのは不適切であろう。

ロシア・カザフ関係の始まりについては、《Казахско-Русские отношения в XVI—XVIII ввек》『カザフ・ロシア関係資料、一六一—一八世紀』の編者は一六世紀末としているが、そうではなく一五世紀末—一六世紀初めからだと結論している。その根拠は、カザフ・ステップを通路としたロシア・中央アジア間の定期的な貿易及び外交関係が、一五世紀末には明らかに存在したことや、マサノフ(Э.А. Масанов)も《Очерк истории этнографического названия казахского народа в СССР》『カザフ民族研究史概要』で挙げているが、一六世紀初頭にモスクワに滞在したオーストリアの外交家、S・ヘルベルシュタインの記録中の記事などである。上限の一五世紀末と断言するにはやや史料不足であるが、一六世紀初めま

でに接触があったことは認められよう。

報告者が最も力を入れているのが、題目に掲げられているとおり、②の段階であり、③は全く触れられていない。②の時期にシベリアから中央アジアまでの交通路が隆盛を迎えたことを説き、それは古来（紀元前四—一世紀）より存在したことが各遺跡から判明するという。故オクラードニコフの専門分野を思わせる部分である。また、具体的な交通路が示され、実際にどのような交易が為されていたか、交易品、隊商の規模など、今までの研究蓄積を駆使して細かい数字を列挙しつつ述べている。ここではその内容にまで触れることができないが、評者は非常に興味深く読んだ。確かに、西シベリアとカザフスタンのつながりは、『シベリア年代記』にカザフのことが記述されていることからわかるように、かなり深いものである。カザフスタン研究は、シベリアとのかかわりを欠落させては不可能だと、評者も思う。

(六) ここでいうカルムクは、いわゆるボルガ・カルムクであるが、現在のカルムク自治共和国までをロシアとの関係を中心にまとめた報告である。主に革命以後が重点的に述べられ、評者の関心のあるそれ以前の部分は非常に簡単である。カルムクがロシア領内に入ったのは、普通言われている一六一六年説を採らず、それを許可するロシアの国書の日付が一六〇九年八月二〇日であるところから、一六〇九年としてい

る。

ロシア領に入って以来、ロシア民族との友好が生れ、カルムクはロシア人とともに外国の敵と戦ったと述べ、例としてクリミア戦争、露土戦争、七年戦争、さらに対ナポレオン戦争を挙げている。しかし、ウバシンの清朝領内への回帰については全く触れていない。これらの戦争に駆り出されたこともその原因となったのだが、完全に無視している。ロシア人との友好を強調し、その証拠として、ロシア人作家、画家がその作品でカルムクをとりあげたことに言及している。このように、この報告はソビエトの少数民族政策の方針に忠実に即したものと言えよう。

(七) によると、一九二〇年代には、北カフカスのロシアによる併合はいわゆるカフカス戦争の結果で、強制的なものである否定的側面を伴ったという、ボクロフスキー (M.H. Bokrovskii) の説が一般的であったが、その後の研究により、ロシアとカフカスの関係はずっと以前、キエフ・ルーシの時代からあり、平和的に編入されてきたが、ダゲスタンとチェチエンのムーリディズムの回教徒たちの抵抗運動で編入が終了したとする。この報告では、その古い時代の関係から筆を起し、ロシアの侵略ではなかったことを証明しようとしているが、評者にはこの問題について判断する力はない。しかし、対立勢力であったイラン、オスマン・トルコの勢力低下と

もにこの地域のロシアへの編入が明確になってきたということとは言えよう。ただ、おきまりの「自発的」という言葉を使うのは問題があると思われる。

(八)は、題目の示すとおり、軍の定期刊行物を史料として注目しようとするもので、主に新聞『Русский инвалид』『ロシアの傷病兵』(一八一三—一九一七年)と雑誌『Военный сборник』『軍事集録』(一八五八—一九一七年)に掲載されたものを扱っている。地理学者ウ・ニコノフ(M. И. Никоноров)の、カザフスタン・中央アジア地域についての軍事的統計的概観を評価し、これらの誌上では他にポターニン(T. H. Потанин)、ロビヤヴィチ(Ф. И. Робцевич)、ロマノフスキー(D. И. Романовский)などの研究者が活躍したという。カザフスタンについて初めて記述されたのは、一八二〇年、『ロシアの傷病兵』誌二八号で、ムラビヨフ(H. Мырзаев)のトゥルクメン・ヒワ旅行記の中である。五〇年代末より、カザフスタン併合の問題が活発に論じられるようになり、公式の報告、レポート、手紙などで誌面が文字どおり埋め尽くされるようになった。その後、ブハラ、コーカンド、ヒワに対する軍事遠征が続くが、この時期の資料も、カザフスタン併合の研究に価値をもつと報告者は述べる。なぜならカザフスタンの最終的併合は、カザフスタン・中央アジア全地域のロシアへの加入完成と結びつけられるからだとしている。これはひと

批評と紹介 森川

つの見解として認められるだろう。

(九)は、内オルダの所轄に関する問題を年代順にたどっている。それは、一八〇一年の成立以来、ツァーリズムの政治行政組織の変遷と無縁ではなかったという観点に立っている。

まず一九世紀の初めには「内オルダの統治規定」によると、アストラハンの国有財産主事が司るとされていて、一八〇八年にはオレンブルク国境委員会と外務省の管轄下になり、その後財務省、一八六二年には内務省、六四年にはアストラハン県、六八年にはトゥルガイ州と、転々とそれは移っている。七三年に特別委員会を設けて論議されるが、結局アストラハン県知事に統治が委ねられる。

内部的な統治体制としては、一八四五年のジャンギル・ハンの死後、ハン位が廃され、代りに協議会が設けられる。ハンの兄弟などカザフ有力者以外に、財務省役人、オレンブルク委員会役人もそのメンバーとなり、一八五八年以降、協議会の代表者の地位は財務省役人が占めた。そして一八六〇年には部族集団も解体され、代りに五つの小区画に分けられる。こうして地方行政システムの導入とともにカザフ自身の伝統的な社会組織は失われ、ロシアの実質的支配が強化された。

事実関係が的確に述べられており、明瞭で簡潔な報告である。

以下の八篇は小報告ばかりであり、ごく簡単に紹介する。

(三)は、タジク人民が十月革命の結果、社会的民族的迫害から解放されたという主旨で、ソビエト政府の援助を受けて労働者階級の設立、技術者の養成が図られ、レーニナバード絹コンビナートに結実したと述べる。カザフスタン併合とは直接関係のない報告である。

(二)は、ウラル・クズネツクコンビナート建設が、ウラル・シベリアのみならず、カザフスタンの経済生活にも貢献したという報告。

(一)は、多民族国家であるソ連邦の中で、ソビエト人民の統一文化の形成を目ざす国家的意図が背景となつていふと思われるが、報告者は、中央アジア・カザフスタンの伝統的民族文化とロシア文化が相互に影響して、より良い文化を作つていふことを主張している。

(四)は、キルギスの今日の発展は、ロシアその他諸民族の援助の下で、社会主義建設過程の中でつくられたと論じ、キルギスの実体があまり浮びあがらない報告である。

(五)は、一八一二〇世紀の旅行家の記録などにカザフの音楽についての記述があるが、それらで伝えられたメロディーを、ロシア人作曲家が使って曲を作つたという事例を指摘した、わずかに二ページの報告である。

(六)は、トゥルクメンとカザフの詩人が、互いに敬意と友情

をもつて相手のことを詩に詠んでいることから、両者の詩に相互関係があることを述べている。

(四)は、カザフスタンのソビエト機関が、当初はロシア人で占められていたが、一九二四年以降、人材養成を行ない、カザフでスタッフを埋める努力が為されてきたことを述べる。

(五)は、異民族結婚の場合の子どもの籍の選び方について、バヤンアウル、エルマク両地区の調査結果をまとめたもの。ロシア人がウクライナ人、その他の民族と結婚する場合はロシア籍、カザフ人がロシア人、その他の民族と結婚する場合はカザフ人籍を選ぶ傾向が強いが、ウクライナ人の場合は一般に父親の籍を選ぶことが多いとしている。

以上、とくに(一)以下はおよそ簡単な紹介に留まったが、全体を通じて気付くのは、あらゆる方面からカザフとロシアの友好関係を証明することに主眼がおかれている点である。この会議の標題からも察せられるとおり、民族政策の立場から、ソ連邦の一部であるカザフ共和国の位置づけという背景があることは否定できないだろう。そして、カザフの場合には勿論、他の非ロシア民族の場合もロシアとの関係を、歴史事実即して、時代を古く遡って説きおこし、侵略によってではなく平和的自発的にロシアの版図に他民族が加入してきたことを論証しようとしている。

それにしても、右の一七篇の報告論文を通して、必ずしも

十分日本の学会には知られていない、ソビエトにおけるカザフ研究の最近の水準を知ることができる。出版物に関してはほとんど手に入る状態になった今日でも、直接アルヒーフを使用しての研究は、我々にはまだ手に届かないところにあつて、今後もソビエトにおける研究に注意を払っていかなければならぬだろう。ただ、我々はそれと同時に自分の確かな視点をもって、実証的に歴史を明らかにしていくことが責務だと考える。

なお、この会議に関しては、別に、ごく最近、*«Известия Академии Наук СССР. Серия История, философия и общественные науки»* № 250-летнюю годовую конференцию посвященную 250-летию добровольного присоединения Казахстана к России』永久にとともに。ロシアへのカザフスタンの自発的併合二五〇周年記念』と題する出版があつたようだが、評者は未だ見る機会を得ていない。

ホルヘ・ブランコ・ヴィヤルタ著

(ウィリアム・キャンベル英訳)

アタテュルク

護 雅 夫

私は、著者についてまったく知るところがない。序文によ

批評と紹介 護

ると、著者は、その父が、アルゼンチン総領事としてイスタンブルに駐劄し、また、著者自身も副領事をつとめた関係上、一九三〇年から一九三五年まで、トルコに滞在し、その「激動期から得た経験を、本書にそそぎこんだ」という。トルコについては、『トルコの人びと』(一九三六)、『現代イスタンブルからの教訓』(一九三七)、『トルコ文学』(一九四〇)、『現代トルコ文学』(一九四一)、『トルコの芸術と文学』(一九七五)などの著作があるが、これらのほかに、『アメリカにおける儀式的カニバリズム』(一九四六)、『モンローヤ——グアラニー族への伝道師——』(一九五五)、『アメリカ諸州の組織』(一九五八)、『ノブレーガ——ブラジル征服の最初の記録者——』(一九六五)、『アメリカにおけるカニバル儀礼』(一九七〇)そのほかの書物を出版している(以上、すべてスペイン語)。こうした業績目録から見ると、著者は、トルコまたはトルコ史の専攻者とはいへない、むしろ、

原著は、一九三九年初頭、スペイン語で出版されたが、それを、ブリティッシュ・カウンスルのアンカー・センター所長ウィリアム・キャンベルが英訳し、一九七九年、「トルコ歴史協会」(アンカラ)から出版したのが本書である。「トルコ歴史協会」が本書を公刊したのは、一九八一年がアタテュルク生誕一〇〇周年に当たることを念頭におき、それを記念するためであったにちがいない。